# 蓼太句集

蓼太句集

和歌ハ國詩ナリ也。變ノ而爲リ連歌ト、爲ル俳諧歌ト。其レ猶ヲ詩變ノ而爲リ騷賦ト、爲ルガ律絶ト乎。時有ニ汗隆一。辭有ニ長短一。俗有ニ正變一。節有ニ緩(緩カ)急一。體裁雖レ異其情一ノミ耳。東都ノ蓼太以テ善スルヲ俳諧歌ヲ聞フ于世ニ。門生寓ス于崎陽ニ。以テ蓼太ノ所ノ著ハス一章ヲ示ス之ヲ清人程

# 蓼太集序

和歌、國詩ナリ也變ノ而為リ連歌為ル俳諧歌ト甚レ猶ヲ詩変ノ而為リ騷賦ト為ルガ律絶ト乎時有ニ汗隆辭有ニ長短俗有ニ正変節有ニ緩急體裁雖レ異其情一ノミ耳東都ノ蓼太以テ善スルヲ俳諧歌ヲ聞フ于世ニ門生寓ス于崎陽ニ以

劍南ニ。程賦ノ一絶ヲ以テ寫シ其章ヲ、且手書ノ以テ遺ル焉。時人艷ニ稱スルヲ之ヲ。丁酉ノ季夏、蓼太載テ酒ヲ顧ル余ヲ牛門ニ。請フ序センコトヲ其集ニ。余與レ之對酌シ、頹然トシテ而醉フ。作ヲ而嘆ノ曰、有ル是哉。昔シ者晁卿與ニ唐人一唱酬シ、明人著ノ日本風土記ヲ、載ス和歌數篇ヲ。然ラバ則彼知ル我ニ有レ詩有ルコトヲ和歌一

蓼太ノ所著一章ヲ示ス之ヲ清人程劍南ニ程賦ノ一絶ヲ以テ寫シ其意ヲ且手書ノ以テ遺ル焉時人艷称ス之ヲ丁酉ノ季夏蓼太載テ酒ヲ顧ル余ヲ牛門ニ請フ序ヲ其集ニ余與之ニ對酌シ頹然トシテ而醉フ作ヲ而嘆ジ曰有ル是哉昔シ者晁卿與唐人唱酬シ明人著ノ日本風土

矣。蓋未ダ知ラ有ルコトヲ連歌一也。而ルヲ況ヤ俳諧歌ヲヤ乎。知レ有ルコトヲ俳諧歌一者、乃チ自ニ蓼太一始ル。今觀ルニ此集ヲ、著作太ダ富メリ。重テ以テ示サバ清人一ニ、則彼ノ五言長城ニ殆ンド將レ失セント墨守ヲ矣。蓋シ我ガ日出之邦、升平五百十年、煥乎タル文敎、洋溢ス海内一ニ。此ノ事雖ドモ

記載ス和歌數篇ヲ移ス則彼知ル我有レ詩有ル和歌矣蓋未ダ知レ有レ連歌ヤ而ル況ヤ俳諧歌乎知ル有レ俳諧歌者乃チ自ニ蓼太一始ル今觀ルニ此集ヲ著作太ダ富リ重テ以テ示サバ清人一ニ則彼ノ五言長城ニ殆ト將ニ失セント墨守ヲ矣蓋シ我ガ日出ノ之邦

小ナリト、可ニ以テ觀ルニ餘波ヲ矣。彼ハ以テシ其詩ヲ、我ハ以テス吾歌ヲ。各稱スル盈耳ト一哉。是ヲ爲レ序ト。

安永丁酉夏六月南畝子序

印印

升平百五十年熈平文教
洋溢海内此、事勢小可以
觀餘波矣彼以其詩我以
歌歌各稱盈耳哉是爲序
安永丁酉夏六月南畝子
序

# 序

まさきのかづら長くつたはり、青柳の糸絶ず、其片糸の俳諧あり。力をもいれずして夕だちの雲を起し、たけきものゝふも諸禮停止に、膝をやはらげらるゝは只此道なり。今や隈なく都鄙にひろごり、田面にかへる鳩の跡久しくとゞまる。それが中に予が

師雪中菴の主蓼太は、はせを翁の顔をさぐり、晋子の花をあらそひ、猶嵐叟の寂は我家にして、年ごろ櫻にうかれ月をかなしみ、郭公には寐ぬ夜がちに、雪のふる日は節に笠に、隅田眞乳のちまたに轉び、洲崎目ぐらしの夕に食をわすれ、あるは途遠き蒼波に眼をあらひ、ある

の入る屋の弦久しくこの春を忘れ中より手ゝ

雪中菴の主蓼太ちゝ我翁の顔を

さぐり晋子の花をあらそひ猶嵐叟の

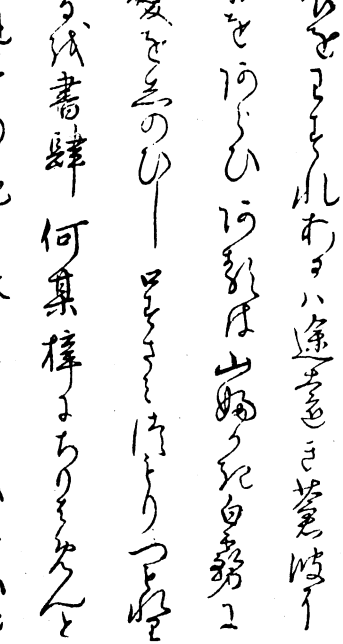
寂ちゝ我家ふして年ごろ櫻にうかれ

月をかなしみ郭公は寐ぬ夜がち

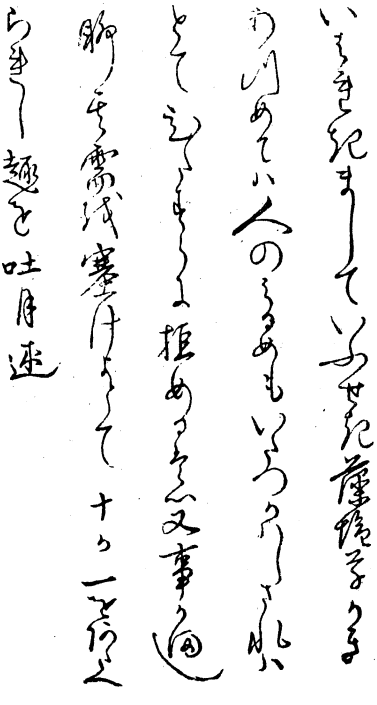
雪ふる日は節ふる隅田眞乳の

ちまたに轉ひ洲崎目ぐらしの夕に

は山ふかき白霧に憂をしのびし口ずさみ、つもりつもれり。さるを書肆何某梓にちりばめんと子規亭の扉を敲く事三たび五たびをかさぬ。師云、俳士に句のおぼきは硯に筆のおぼきに似たりと誰やらもいはれき。ましていぶせき藻塩草かきあつめては、人のみるめ



もいたづかはいまを紀まして いつせを紀屋敷をうる
し。さればとてひたすらに拒めるも又事がましし。聊其需を塞げよとて十が一をあたへられし趣を吐月述。



## 春旦

元日やうつはの水も伊勢の海
誰ひとり掃とも見えずけさの春
筆捨ぬ松こそよけれはつ硯
初鶏や又市に住甲斐ひとつ
若水や升なき時の人ごゝろ
今朝の春鳩の三枝を見付たり
黒きもの又常盤なり初からす
万才や爰八橋に醉てゆく

鉢植の其形はでゝむしとい
ふものに似たれど、觸蠻の
うごきなき此花のあけぼの
を愛して

あらそはぬ國いたゞくや福壽草

五日の風枝をならさぬ此君
が代の春をむかへて、こと
しも東西の行脚をおもふ。

初空や十日は蓑のきそはじめ

東叡山のうしろ、根岸といへる所に、膝いるゝばかりの蝸廬をしつらふ。この地や、こと所より鶯の音色ちるはしといへば、爰にことしの春を迎て田家の閑をうかゞふ。

しづかさの鍬にさし入はつ日哉

壘代

初霞長柄の橋もかゝるなり

人日

摘まぜて雪と八色の若菜かな
かゝる物賞ぬ代ゆかし若菜摘
若菜そゝぐほどは解たり忘水
澤蟹の鋏もうごくなづなかな
裾野から山摘起す若菜かな

乳峯如風とすみだ川に遊て

つまずとも爰を關屋の若菜哉

子日

此君とけふはひかるゝ小松かな

削懸

正月も影はやさびし削かけ

梅

梅が香の岩にしむ時水の音
むめがゝや心つよくも厚氷
咲かねる梅とあらしの日數かな
詩にねぢれ和歌に匂ふや梅花
三絃も接穂時なりむめの花
香について廻ればもとの梅花
梅が香の外にこほらぬ物は何
むめ咲やとまるもの皆にほひ鳥
梅枝をはづれて寒き入日かな
むめがゝや衣桁にうごく袈裟衣

社頭

梅香や風に百度の向ぢから
紅梅や神のこゝろも堅からず
紅をねぢれて梅のしほりけり

臥龍梅

道〻も此木這てやむめのはな

鶯

うぐひすの九ツねりて初音哉
鶯の鳴そこなふてかくれけり
うぐひすや月の星のと日和乞
鶯の朝隈さぐるはつ音かな

春眠

鶯の中に戸明ぬ都かな

老鶯巣

端居して鶯に顔見しらせん
鶯の音にふくるゝ歟折〳〵は

柳

むつとしてもどれば庭に柳かな
青柳やとし〴〵の老のつまさがり
いかづちのはるかにうごく柳かな
裾迄はまだ暮きらぬやなぎ哉
家ひとつ市にしづまる柳かな
二間三間影吹入るやなぎかな
ゆり分て北枝もはやき柳かな
此庭へ能は這入てやなぎ哉
柳見て柳ほしいとおもひけり
橋にして踏だものから柳かな

霞

洛陽の朝餉過たり春がすみ
かすませて子やおもふらん蘆の鶴

行旅

馬借てかはる〴〵にかすみけり

大井川

落來るや霞もあへず大井川

大和行脚留別

うしろにも前にも遠き霞かな

霞關

誰どの〻御先追らむ朝がすみ

奈良にて

夕霞たきゞの皷しらべけり

春月

五六丈瀧冴返る月夜かな
折ふしの衢も遠し朧月
鹿もよく寐て朧なり奈良の月
南から出たかもしらずおぼろ月

駿河の國に行脚しける頃、女の琴彈けるに對して

ふきといふも草のまくらや春の月
春の月櫻ひと枝ひろひげり

猫戀

柊ふむ夜半も有べしねこの戀
濡たらば露とこたへよ猫の戀
おもひ寐の尾に虵もしつ猫の戀

我庵の老猫にたはぶれて

鏡見ていざおもひきれ猫の戀

白魚

雪帆樓

白魚やそれとしる火の凄からず
しら魚や波わけのぼる友ちから

淡雪

淡雪や側から青き春日山
淡雪の降すがりけり去年の雪

雪解

雪解ややう〳〵四百八十寺

余寒

酢どのみの跡から春の寒さ哉

春風

春風や一度に起る雪の竹

誰をたが待伽羅ならむ春の風

春雨

鶯のぬれて啼なり春の雨

双六を退ば音ありはるの雨

春雨や枯るものには蓑ばかり

夜新の傘へあまるや春の雨

春雨やあかつき見れば松の雪

はるの雨硯に請て假名かゝん

大津にて

三井寺の鐘きく春の雨夜哉

陽炎

陽炎の掃よせてある屑火かな

濱松屋帳

岩角に兜くだけて椿かな

鳳巾

きれ凡巾の夕越ゆくやまつち山

きれ凧に主なき須磨のゆふべ哉

海苔

此頃の朝夕やすし海苔二枚

青海苔をとゞけて白し磯の波

仲春

松梅と暮て正月二月かな

神事の跡はほとけの二月哉

紅絹裏のうつればぬるむ水田哉

鑁持山

筆取てむかへば山の笑ひけり

箱根

蹠跛ひく人を笑ふ歟はこね山

雉子

錦木にその尾立る歟雉の聲

聲しぼる諸羽に雉のあぶら哉

あけぼのやや櫻をふるふ雉子の聲

たまごにはあぶなき雉のほろゝかな

涅槃

ねはん會やおくれてひとつ飛胡蝶

燕

どちらから化して禿ぞ燕ぞ

雲雀

朝凪やたゞ一すぢにあげ雲雀

ひとつ家に聲降くらす雲雀かな

夜もすがら空に居たかとひばり哉

菜の花に落て麥から雲雀かな

雀子

雀子や余寒の蠅を追まはし

蝶

植木屋の置て行たる胡蝶かな

寐る時はふたつでもなし飛胡蝶

蝶〻や乞食の夢のうつくしき

つまむかと酢味噌を逃る胡蝶哉

蛙

つちくれにうごく物みな蛙かな

亭の燈の水にうく時かはづ哉

もとの閨に疊も荒て蛙かな

傾城の物ほすかたや鳴かはづ

種室の夜〳〵にえる蛙かな

富士根方にて

畑うちや大藤内が丸はだか

菫

人ふまぬ都わづかに菫かな

池田の宿にて

先ゆかし熊野が摘たる菫かと

野の宮

そこらひく牛もなつかし菫草

菜花

菜の花にのどけき大和河内哉

春望

春の日や門ゆく梵論の影法師

八橋

杖立て春やむかしの橋ばしら

大磯

祐成が惜みし春の夜明かな

爐塞

爐ふさいで二日もどらぬあるじ哉

苗代

秋風の二葉に寒し苗代田

雛

桃櫻白髪の雛もあらまほし

消かゝる燈もなまめかし夜の雛

三日四日の細みも雛の月夜かな

つれ〴〵と月見て立り紙雛

草餅

たち屑も女なりけり草の餅

下草の桃にはなれず蓬もち

胡葱

胡葱や小野の小町が物ごのみ

あさつきやどう結ても女文字

桃

桃咲や牛のよだれもやまと歌

汐干

ふり返る女ごゝろの汐干かな

出代

出かはりや四月へまたぐ大男

出かはりや飛鳥井翦て櫻町

花

おれ〴〵と折せて花のあるじ哉

長閑さは夜にこそあれ花ざかり

花散て猶永き日と成にけり

かばかりの花に置らむ夜の霜

成佛の棺ゆくらん花ざかり

是ほどにちらずばたゝじ花の陰

身にしみて音聞花の雨夜かな

落たるを拾ふ鳥なし花ざかり

芝居皆やすむでもなし花盛

東叡山

雲雪や世に手をられて花切手

洛陽

歌一首もたぬ山なし花の雲

傘さして駕かく花のみやこ哉

舊都

紅葉より花にかしこし奈良の鹿

芳野

しら雲やちる時花のよし野山

藝にやどりて

めづらしや芳野を下りて花一木

花喰に鮎ものぼる歟よしの川

芳野大瀧

ちる花をあつめて瀧のみかさ哉

苔清水

苔清水花かきわけて結びけり

初瀨

むかし誰被はねてや峯の花

深草元政古墳

月に花に法の杖あり竹三もと

櫻

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

我宿の櫻わすれてくらしけり

割あまる都の外はさくらかな

來た道を又奥にせん櫻がり

ちる櫻ねぢよる人に倦ときぬ歟

物惜む老に見よとやちるさくら

夜さくらや三味線彈て人通

しばらく芳野の山中にとゞまりける頃、名ある所〻の花びらつみあつめて、武江の詞友のもとに交遣すとて

ひとつかみしら雲贈る櫻かな

宿かして是へとちるやゆふ櫻

うごかせば月こそ出れちるさくら

辨當で夢見歩行や山さくら

羨山居

櫻戸や膝にはつけぬ鎧わらび

日暮ては寺のものなり山さくら

早蕨の爪はぢく間ぞちる櫻

けふばかり老につもらじ散櫻

庚辰の如月六日家を失ひける時

ちり果て火宅を出たり家櫻

海棠

海棠やおられて來てもまださめず

海棠や花の中よりうす紅葉

躑躅

旅籠屋の夕くれなゐにつゝじ哉

鹿島にて

人の代に成て見上るつゝじかな

若鮎

若鮎の鰭ふりのぼる朝日かな

若鮎の小太刀遣ふて逃にけり

水がへば駒のひま行小鮎かな

山吹

山吹や旭のまゝに暮てゆく

やまぶきや月も尋て澄あたり

藤

投かけてたのむ色なり松に藤

立さればまだ日は高し藤の花

山寺や一日ふぢの影ぼうし

春夏のおぼつかなさよ藤の花

行春

夕雲雀落るや春のとまりより
ゆく春やどちらへ渡る瀬田の橋
あれ春が笠着て行はきてゆくは
行春や一聲青きすだれうり

# 蓼太句集　夏之部

更衣

橋ひとつ出懸に寒しころもがへ
我に綿ぬきすまさせて寒さ哉
武士の矢ばせに立て袷かな

鳥酔と洛西に杖を曳て

いさ嵯峨も廻らばまはれ衣がへ

時雨窓に隣て一老婆あり。よく樂天が句を聞。德山の轉心をすゝめて其深切なるに、四十余里の勞を忘る。

先門の姥に用ありころもがへ

白重

すき立て猶黒髪や白かさね
白かさねにくき脊中に物かゝん

若葉

鳥啼てしづ心ある若葉かな

郭公

見ぬ春をこがれ歩行歟ほとゝぎす
是からは鳥の蜚やほとゝぎす
郭公一聲夏をさだめけり
耳すますけしよ牡丹よ郭公
釣かゝる軒から出たりほとゝぎす
竹植て寐ころぶ空やほとゝぎす
鳥影に鳥またれけり郭公

京にて

君がため音や惜むらんほとゝぎす

嵐山にて

二の聲は手をる花なり郭公

箱根

雲踏で聞日も遠しほとゝぎす
ほとゝぎす鳴や氷室の一雫
遠寺から寐よとの鳥やほとゝぎす
かたはらに鳥なきそらや郭公
ほとゝぎす巣を蹴落して出ける歟
一とせに三ツの月見やほとゝぎす
木鳴して又物たらずほとゝぎす
世を驚の五位ものぞまず郭公

灌佛

山寺や五色にあまる花御堂

牡丹

月はひとつ影は牡丹のひかり哉
櫻ちる果やぼたんの雪丸げ
花はまだ雨ほしあへぬ牡丹かな
白雲の空ゆりすへてぼたん哉
鳥遠うして高欄に牡丹かな

明和九年四月廿五日、深川はせを庵再興成就の日、吏登翁十七回忌をまねきこして

取こして牡丹を蓮のうてなかな

青簾

爪さきを戀のはじめや青簾

葵祭

げに僧は木のはしとこそ諸かづら

杜若

何鳥の冠に着せんかきつばた

鳴越に使は來たりかきつばた

鬱粟

しらげしに續てもろき月夜かな

麥秋

乞食せん世はあたゝかにはだか麥

旅寐してしるや麥にも秋の暮

麥の穗も出揃ふ卯月八日かな

茄子

一富士の隱るゝころやはつ茄子

筍

竹の子や花ちるさとの男きれ

筍をゆり出す竹のあらしかな

竹の子や客にほらせて亭主ぶり

鰹

くれなゐは花にかぎらじ初鰹

面白の妻なき宿やはつがつほ

鮓

誰にたが宿がして此ひと夜鮓

津のくにの伯母にこりてや鮓の壓

蓼に露持せて長しすし一夜

いとはずと是にいひけんすしの飯

大磯にて

鮓に肌ふれぬもうれし虎が石

花柚

惟光をふまへて手折花柚かな

一枝はもらひ過たる花柚かな

葛陂山人の洛におもむくを送る。

柚の花や立場〳〵の詩百篇

或人のものいふ女のもてる

貝ふたつもてつくりたる盃

の形は、さながら棚なし小舟といへる物に似侍ける。是に銘を乞れて

二へぎの花柚も嬉し星の舟

實櫻

實さくらやなを頼もしき吉野山

下闇

下闇に乾かぬ閼伽のしづくかな

黑塚

桑子さへ齒音おそろし木下闇

和歌浦

讀かねる葉の茂なし和歌浦

身延

此山の茂や妙の一字より

宇津山

蔦に道習ふて越るしげり哉

後醍醐帝御廟

百官の高み低みや夏木だち

霞雀

よしきりや漸暮て須磨の浦

隱家は市こそよけれぎやう〳〵し

水鶏

日やけ田に水門たゝく水雞哉

菰草の奥は畫なき水鶏かな

翡翠

やどりぎの花ほど蓮に翡翠かな

蓮に居て蓮に遊ばぬ翡翠哉

川蟬の風かほるかとおもひけり

新茶

摂尾

唐土のさびしさ見せて新茶哉

しばらく洛にありて

嵯峨の柴折焚宇治の新茶かな

駿河の國にありける頃、子

來子が蘆の湯の舍を音づれ

けるに、茶の一興あり。

三嶋から飛石いくつ苔のはな

絶〻に溫泉の古道や苔の花

閑呼鳥

我に來てとまりさう也かんこ鳥

竹青し木青しひとり閑呼鳥

桐花

酒桶の脊中ほす日や桐の花

螢

うしろから胸はしり火の螢かな

追れては月にかくるゝほたる哉

遊ぶ手に闇の末つむほたるかな

傘さして螢の音を聞夜かな

闘の燈のひとつうごかぬ螢かな

端午

難波津にて

幟見の果はありけり帆懸船

京にて

怪どく時我手の黑き粽かな

常世かと古きも立る兜かな

百煉鏡

煉かけて鏡暮けり五日月

競馬

翠簾越の誰に落けんくらべ馬

忍摺の石を尋て

見てのみやいさ帷子にしのぶずり

五月雨

五月雨やある夜ひそかに松の月

竹ひとつ書おぼへけり皐月雨

さみだれや艪艈にさはる蘆の音

橋を漏水音暗し皐月雨

夜はせめてほたる飛なり五月雨

旅行

川越る日も有なしや皐月雨

逢初川は伊勢熊野の二神は

じめてま見えたまふ所とか

や。爰に霖雨の夕晴もうれ

しく

紀の月に逢初川や皐月晴

藻花

藻の花や際なき水の中ながら

田植

松に日をうたひ出したる田植かな
遠里や二筋三すぢ田うへ笠
ひとりして月より淋し田植笠
山陰や人目おもはで田うへうた

乳守の遊女、此御田の乙女つとめてより川竹の名をのがるゝとあるも、ありがたきためしならずや。

住吉御田

神苗やけふをうき身の忘ぐさ

二州橋のほとりに庵を結し頃、山居せば上田三反味噌八斗小者ひとりに水のよい所、とある禪師の狂歌をおもひ出て、そこに商家の名のおかしければ

玉苗の門田持けりいくよ餅

青田

南都豐古

冬田より青田に悲し奈良の京

當麻

青田さへよし染寺の右ひだり

田草

物いはぬ夫婦なりけり田草取
山ひとつ脊中に重し田草取
秋の來る道つくるらん田草とり

若竹

それに競それにくらべて今年竹
岩を出て嬉しさう也ことし竹
どちらからつるゝぞ麻に今年竹

鵜舟

鵜づかひや朝ゝおもひ捨小舟
影も鵜に成てはたらく鵜飼淺
鵜づかひや其子に讓子にゆづり
つかれ鵜や遠寺の鐘も木の間より

照射

句兄弟

祐成がある夜戀せぬ照射かな
時致は山ふみなれてともしかな

蚊遣

隱家の暮て葉に洩蚊やり哉
蚊やりして後夜から里の月夜かな
爰かしこまだ寐ぬ里の蚊遣かな
蚊遣火やうらやましくも松の月

白骨觀

夏瘦のわがほねさぐる寐覺かな

祇王寺

尼寺や紅粉白粉も蚊やり草

高野

蚊の居ぬも浮世の外ぞ嶺の月

紙帳

我庵は紙帳かぶせて置うよや
業平の知て居らるゝ紙帳かな

夏草

菊作る思案の外や美人草
しのばるゝものや葵の五六月

花かつみを尋て

里人はわすれ草とも花かつみ

小夜中山

紫陽花や襟につらるゝ八から鉦

紀州親しらず

荒磯や撫子しらず親しらず

秦徐福古墳

撫子の唐をやまとに塚經りぬ

庚辰の春家をうしなひて、暫南總吏仙が別莊にありける頃

杖立てさゝげ這するやどり哉

蜚がほやひとり横たふわたし舟

ひるがほやたま〳〵むすぶ波の露

蜚顔や明るう咲て戀しらず

夕がほや空也の目には卽菩提

瓜

はらばふて瓜むく軒のかげり哉

瓜畑やいざひや〳〵と草まくら

氷室

六月を櫻に知るや氷室もり

六月の氷もとゞくみやこかな

祇園會

祇園會や人をもる燈の薄ごろも

祇園會や京は日傘の下を行

富士詣

其夜降宿の浴衣や富士まふで

白河關

片袖は秋の風なり夏ごろも

竹婦人　鐘

青きよりおもひそめけり竹婦人

曉は小町がほねや竹婦人

蓬生や手ぬぐひ懸て竹婦人

七符とも三符ともいはず竹婦人

胸髭に風こそわたれたかむしろ

蚕

客ぶりに見送る蚕の行衛哉

團扇

兩の手にうちわ遣ふや小傾城

植つけの田づら見て來る團扇かな

讃

おもしろのうちわや、とれば月、置ば影、おもしろの團扇や。

もの書ばかつらに似たり白團扇

扇

聽聞の跡は扇のあらしかな

いはけなき子にとられたる扇かな

清水

洛より東武におもむくとて

我影に先あふ關の清水かな

涼しさは千尋なりけり苔清水

家ふたつ中に流るゝ清水かな

山伏の汲ほして行清水かな

遊行柳

ひとすくひ腸洗ふ清水かな

自得

晒見てなを惜まるゝ月日かな

著

市中

三味線にから白のせてあつさ哉

大津繪に丹の過たる暑さ哉

捨苗の道〻枯てあつさかな

西陣

龍虎織手もあらそふて暑かな

貞德翁舊跡鳥羽日(實)相寺

夏陰や寺を御傘のあまやどり

かしこに招れて珍膳にむかひ、袞に膝を屈しては美味に舌打すれども、枕取たる我庵の夕べは心やすきをおもひ出して

帷子やぬげば風もつ物ながら

沖鱠　鱠

誰人の凱陣よりぞ沖なます

鱠賣の阿字と聞ゆる耳もがな

雲　峯

のぼるほどつかるゝ日あり雲の峯

蓮

菅笠の影から蓮のうき葉かな

にごれるは葉とそよぎけり蓮の花

白蓮に人影さはる夜明かな

悼更登翁

六月を經帷子に名殘かな

一周忌　畫像前

秋またぬ人のもぬけを泣日かな

三廻忌

似た人もなき六月の紙子哉

石碑造立

三伏の夏なき石の膚かな

夕　立

夕立や相合傘は晴てから

ゆふだちや地には青田の篠をつく

納　涼

皿ひとつ氷にくだく納涼かな

町の燈のひとへ櫻や夕すゞみ

足代に住持のしらぬすゞみかな

岩つたふうつり心や夕すゞみ

涼しさや寺は碁石の音ばかり

木鍬の落葉聞なりゆふすゞみ

神奈川僧

ふところへ入來る帆あり夕すゞみ

白隱禪師相見

涼しさや富士と和尚と田子の浦

龍花寺

わがこゝろ飛かと富士に鷺涼し

下紐關

下紐の關もる母やゆふすゞみ

麻斤が田家にありて

牛馬のこゝろもしりぬ夕すゞみ

四條河原

風涼し扇の立葉浮葉より

太神宮法樂

僧に似たりとて、宮中をゆるされず。五十鈴川の流をへだてゝ拜したてまつる。

我影も鏡にいれて神涼し

ふたゝび武隈の松にいたりて

我老も松のおもはむ下すゞみ

不忘山

かゝる日も雪わすれずの山涼し

夏月

野山より市のものなり夏の月

御祓

人去て誠見えけり御祓川

白鷺に烏帽子着せばや御祓川

# 蓼太句集　秋之部

立秋

流ゆく茅の輪にしるやけさの秋

鷺とめて艫にも立やけさの秋

秋たつや一むら雨の雫より

虫の音の下萌聞や今朝の秋

忘ては秋たつ朝な〳〵かな

一葉

あけぼのゝ青き中より一葉かな

暦ほど音して桐の一葉かな

糸きれて琴にもしるや桐の秋

七夕

明やすき薑つまん星ひと夜

鵲や橋にあまりてみをつくし

星に琴かりて更行端居哉

宵月や妻越舟のとゞく迄

星まつる夜殘の暑忘がたく、

隅田川に小舟をさして

星逢に雪の橋かけよみやこ鳥

仙府の人〻にとゞめられて

長居して星の一夜にわらはれん

七種や葛にうらめば萩に露

八日星

立琴も寐せるや星の二日醉

秋草

薑や秋は朝からあはれなり

あさがほや猶まぼろしの軒ひとへ

我ものに手折ばさびし女郎花

嫌捨によろぼひたてり女郎花

荒牧の中に痩けりをみなへし

眞間寺にて

眞間の井や道を千尋にしのぶ草

阿房宮賦をよむ

鬼灯や三千人の秋のこゑ

蓼の花嵐ののちをさかりかな

松風の畫は根にある薄かな

淋しさの都へうれるすゝきかな

くれなゐもかくてはさびし烏瓜

魂祭

月見れば人の顔なり玉まつり

世の中や鯛もくさらず魂まつり

亡師の新盆をむかへて

迎火やことひふまれぬものゝ影

此客に軒つらばさぞ鑒まつり
人のをく露としりつゝ玉祭

燈籠

夜〻は松に秋あり高燈籠
燈籠の中からさびし揚燈籠
燈籠や手をつくしたる風の前

躍

秋風に人まづなびく躍かな

京にて

飛〻に旅人黒きおどりかな

稲妻

稲妻や闇さへ洩て不破の關
いなづまや槇の夜雨のかはく迄

蝗

刈跡の薄にすがるいなごかな

奥州野田玉川

追立て蝗に見ばや川千鳥

稲

夕風や鶴もうごかず稲むしろ

駿府竹林精舍

此こゝろ推せよ花に五器一具
紫陽花を五器に盛ばや草まく
ら　この二句を父母にして

刈かゝる田づらも嬉し五器一具

鳴子

引あげて松の月夜や鳴子縄
活て居る身のからくりや鳴子引

添水

秋風の水を切かと添水かな
月細うこぼし減して添水哉

案山子

人先にやもめの立る案山子哉

河内路を過るに

楠のよろひ着せたるかゝしかな

秋蠅

飯もれば這て來るなり秋の蠅

秋蝶

けふ見ればやもめになりぬ秋の蝶
草臥て土にとまるや秋の蝶

虫

日暮ても野は錦なり虫の聲
眼を明ば晝寐なりけり虫の聲
十ばかり耳ある夜也虫のこゑ
虫の音や道ほとあけて長堤
我影の壁にしむ夜やきり〴〵す
冬瓜の腸たつ歟きり〴〵す
あれ聞て痩ぬ虫なしきり〴〵す
人ちかき命になりぬきり〴〵す
蜩や蟬を洩來る秋の聲

文月十日あまり天府雅君に召る。御庭の月いとしら〴〵しけれど、いまだ殘の暑堪がたき頃なりければ、かたへの人〻に仰事有て

虫どもゝ末の露なり砂糖水

蜻蛉

うごく葉の日なたおさへて蜻蛉哉

霧

覺束なはね橋ひとつ霧間より

松嶋にて

朝霧や跡より戀の千松しま

秋風

秋風やかりそめ事の一葉より

秋風に片羽煩ふ胡蝶かな

秋風や人にかけたる蜘の糸

秋の風芙蓉に皺を見付たり

高館懐古

前後の戎衣一におさまり平泉のさかんなるを見るに、大路に車の行あり歸あり。左右の家々は軒むつび、はしらちぎりて、いとめでたし。蟻のどくにあつまれる人も、顔あたらしう過がてに、いづち行らんもしらず。たけきものゝふは金鞍にまたがり、たをやかなる女房は銀簪をかざす。糸による柳の御所はみどりに、琴の音をたやさず。風かほる伽羅の御所には、袖をひるがへし裳をかゝぐ。猶四方の風色をいはゞ、衣の關は、もろともにたたましものを、といづみ式部が離情をつくし、衣川は、たもとまでこそ波はたちけれ、と源重之が涙をそゝぐ。衣が瀧ころものさと月の山は、ながれに湧、白山には雪のあけぼのをおもふ。國見やま室根山たはしね山は、はなのくもにそひ、えいなせのわたりは、ほとゝぎすのいなせ鳴なり。いはゐの里は木立しぐらみ、金鶏山はあかつきを報じて、時守がつゞみを和するに似たり。はた毛越寺の堂塔四十余、禪房五百餘宇、中尊寺金色堂、經堂、吉祥堂、あらふる神社佛閣、山々日に映じ月にかゞやく。なかんづく、びはの柵は義士和泉三郎の砦にして、碧流岸をうち北上川に落て、高館にそふたり。源廷尉にかしづきたる屋しき〳〵は、衆星の北辰を遶るがごとく、こゝに立かしこにわかつ。まいて秀衡一門の榮耀さらにいふべくもあらず。口をあまんずるには、鳳を裂、麟をほふる。目をよろこばしむるには炎天の梅花玄冬のさくらも、すべてこのときにおくれじとよそほふ。鶴は九皐のちまたに千秋を諷、龜は十符の浦に万代をことぶきしも、たゞ今たゞ

山そびえ川ながれたり秋の風

仙臺嘉定庵留別

名とり川細うながれて、桑乾の水をわたりしいに

しへのひとの面影もおもひ出て

跡先にふるさと持ぬ秋のかぜ

秋浦吟

秋風や硯もなびくはなすゝき

必觀主人の閑亭に、半日の殘暑をわすれ侍て

干てある鎧に來たり秋の風

秋柳

いそがしや遊び過して散柳

花野

あだし野に行あたりたる花野哉

追剝に夜はふりかはる花野哉

秋夜

合歡の木の枕ひかせん老の秋

須磨

宿借て寐ざめしらばや須磨の秋

諏訪湖水

秋の水に富士をひたして猶寒し

ある人にもてなされて

喰てしる七玉川や鮎の秋

上總千種濱

しら波の染にあがるや千くさ迄

露

白露の果はありけり六玉川

農家に八十の老を賀して

米の秋杵ふりあげる翁かな

秋暮

道問ば一里〳〵と秋の暮

鐘つきにのぼるも見えて秋の暮

潮見坂

舟くだく海とは見えず秋の暮

墓ひとつ顏見合せて秋のくれ

眠我と墨水に遊ぶ

木母寺を力なりけり秋のくれ

我庵を客と立けり秋の暮

雪帆樓

捨て行歸帆ならねど秋の暮

高舘毛越寺懷古

礎をかぞへあまして秋の暮

蕎麥花

蝶鳥の目にも後段や蕎麥花

蕃椒

傾城の樂屋おそろし蕃椒

瓢

うか〳〵とまだ花のあるふくべ哉

鴈

二羽〳〵とかぞへて悲し鴈ひとつ

初鴈や平砂にはやき月の霜

初鴈や北斗と落る水のうへ

小鳥

連雀やひとりしだるゝ松の中

鵰の來て一荒見ゆる野山かな

ひよどりの一羽わたらぬ庭もなし

崩してはかぞへなをすや四十雀

文殊奉納

山雀や文殊の智惠のむきくるみ

武庫山

武庫山の眠さますなわたり鳥

下總浦つたひ　二句

朝風や小雀のとまるみをつくし
鶺鴒や潮來をしへて岩づたひ

芭蕉

さびしさの來る橋懸て芭蕉哉
染かねて我と引さくばせをかな

柿

物荒て時めく柿の木末かな
澁柿や代〻の歌にも撰殘し

待宵

待宵やところ〴〵に女郎花

良夜ちかき頃、鬱且が温泉の山に行を送る。

月の時そちら向ふぞこちらむけ

良夜

月を出て月に野山の入夜かな
ひとつとはおもはぬ夜也けふの月
名月のさがして照や岩間水
名月や巣を守鶴もよもすがら
名月や汐滿來ればさゞれ蟹
名月やねぐらも見えて花に鳥

二州橋邊機石別莊

かつらからさす枝の橋やけふの月

田家にあそびて

浮雲に鳴子ひかばやけふの月
僧はたゝく八百屋の門やけふの月

深川舟遊遙

川上と此川下や月の友

とはせを翁の申されし五本松もたゞ一木殘れり。

十人の月見の友や松ひとり

鹿嶋

笘船を神代の宿に月見かな
名月や何つく音もさらし臼
名月や物うつさじと西へ行
名月や生れかはらば峯の松
名月や月より外にくまもなし
鳥啼て漁村の松の月夜かな
名月や燈をけす風もかつらより

一谷

ふるゝとの寄來る波や須磨の月

十六夜

柴屋寺にて

いざよひや闇からあまる鹿の聲
十六夜やこよひは闇の惜まるゝ

初汐

はつ汐や竹の裏行人の聲

野分

金屏に雨吹いるゝ野分かな
岩端の鷲吹はなつ野分かな

駒迎

旅人のはしり拔るや駒むかへ
駒牽や日やけて甲斐の黑おのこ

相撲

大内の砂を土產や相撲とり
しほらしや灸すへたる角力取
女ほど櫛笥持けりすまふとり

眠江亭

みどり子や見る目の前に相撲とり

相撲とるおとこいくたり庭の秋

夜寒　新綿

半分は青き蘆火の夜寒哉
竹賣て枝焚宿の夜寒かな
四十から酒のみ習ふ夜寒かな
里は今綿あたらしき日和哉

菊

荒〻て露もさだまるや菊の花
ものいはず客と亭主と白菊と
傾城の枕ふみてや菊つくり
あの露にうがてる石敷岨の菊
白菊や花のこぼれて葉の雫
蝶ひとつ菊に喰入日和かな
ひと雫葉から油やきくあはせ
舌たらぬ兒にもとらむ菊の酒

漁村重陽

魚の名も菊色〻のしづくかな

木曾路

家ごとに祖父ある菊の山路哉

婆心公にて

しら菊やあるじの花に暮殘

白きにも浮世の善惡や菊あはせ

後月

若がへる菊のためしや十三夜
暢つらぬ心に野あり後の月
白魚のかいこ(卵)うごくやのちの月
稲懸て里しづかなり後の月

金澤にて

隈〳〵は海士の焚火や十三夜

新蕎麥

新蕎麥とこそ三盃の夢の〻ち
新そばや座敷で悟る棒の音

茸

茸狩や月の干潟の小松ばら

尾越鴨

尾を越て命いそがし鴨の聲

うら枯

うら枯や逃ぬ水には丸木橋
うら枯や月の哀よりも日のあはれ

紅葉

九重を中に野山のにしきかな
掃音も聞へてさびし夕紅葉
影落て江はうき草の紅葉哉
人あしの歸がちなるもみぢかな

諏訪秋宮

花よりも紅葉にはこき涙かな

しもつふさ德聖寺の庭上に

七色のやどりぎあり。

やどりぎや幹を花瓶に花紅葉

碪

是よりして年波よせる碪かな
遠里の都に出來てきぬたかな
目にかゝる月の裸や小夜ぎぬた
轉こけさうな家に碪の拍子かな

あるひとの閑居にいたりて

夜嵐や翌の柚味噌も梢より
釜かけて柚味噌のうらみ聞夜哉

菅野氏の遠眺樓にて

すさまじき長月頃の花火かな

鹿

くれなゐの糸とこそきけ鹿の聲

鹿の音や千尋におろすみなの川

新酒　濁酒

山紫と千種の濱に遊て

新酒あり鵜に鮴の所望せん

隈なきをのみくむ物歟にごり酒

落水

帆のうかぶものに成けり落し水

九月盡

秋風と木がらしの出帆入帆かな

錦着て夜ゆく秋を惜みけり

# 蓼太句集　冬之部

初冬

初冬の機に入てやきりはたり

時雨

植ながら松にしのぐや初しぐれ

秋風は蓑にのこりて初時雨

色かへぬ葉には露なりはつ時雨

鶯の笠さがしけりはつしぐれ

市中は胡蘿染てしぐれかな

夜座

傘たゝむ音にこそしれ初時雨

今朝見れば松の葉つもる時雨哉

夜もすがら我に髭ふる時雨かな

小春

祖師達の忌日〳〵を小春かな

葉を踏でおなじく惜む小春哉

山は今樵夫の笑ふ小春かな

冴返る日までよく似て小春哉

駿河の人々にわかるゝ時

身ひとつの霞なりけり小春風

十夜

我戀は婆々になりたる十夜哉

口切

口切や苔の價も唐にしき

芭蕉忌

百回忌を七十年の今日に

まねきこして、深川要津

寺に俤塚造立の折から、

西上人の花の陰にて我死

んと詠ぜられしを思ひ出

て

我ねがふ小春の望や十二日

駿河路や虛橘も茶の匂ひ

とありし桃舟亭に興行あり

て

はせを忌や飯をゆかりの茶に染ん

掛川より贈れる布をまとひ

て

冬枯や人には葛の居士ころも

落葉

又春の來るとも見えぬ落葉哉

雜冬

さびしさの眼の行方や石蕗の花
十月のあらいそがしや花もみぢ
たくはへて罪なき菴の干菜かな

枯柳

枯柳筏の飯にけぶりけり
枯〻て月を柳の洩夜かな

冬牡丹

富りとはこゝをいふらん冬牡丹
姿をく柴のあみ戸や夕ぼたん

枯野

牛の尾の外はうごかぬ枯野かな
馬と見て一里は來たり枯野はら

鶴鷸

夕暮の篠のそよぎやみそさゞゐ
見ぬふりに物拾はせんみそさゞゐ

冬籠

灰占に先何待んふゆごもり
おもひかねて月見に出たり冬籠

歸花

おもてきる地主の木の間やかへり花
春雨とおもふ日もありかへり花
夢に似てうつゝも白し歸花

火桶

こぼれ居る官女の中に火桶かな

巨燵

鎧着て須磨のみやこの巨燵かな
長居して巨燵も闇になる夜かな
極樂の道へふみ込こたつかな

凧

木枯や瀬田行ものは月ひとり
凧にこがらし焚てしのぎけり

水仙

河竹の名には流ず水仙花

頭巾

きか猿は先飼馴て頭巾かな
傾城の市にかくれて頭巾かな
千鳥鳴うしろ月夜の頭巾哉

紙子

羽二重の京に嵯峨ある紙衣かな

容は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑を失ふ。

客の來て我に音ある紙子かな

老鶯巣

戸さゝぬを我錦なり紙ぶすま
菜大根鶴見て老をやしなはん

網代守

世わたりのはづれ〳〵に網代かな

ぬくめ鳥

爪たてぬ心もあはれぬくめどり
ある時は一はい鷺やぬくめ鳥

顔見せ

顔見せや紅粉白粉も菊の水
かほみせや誰に遠寺の鐘の聲

髪置

髪置やひと花さける肩ぐるま

霜

鉞立の門たゝくなり霜の聲
橋守へ橋はもどりて霜夜かな

氷　つらゝ

障子はるこゝろの水やはつ氷
鴨遠し夜半の氷いづこまで
一雫しては入日の氷柱かな

炭

賣よりも買人寒し炭二升
更る夜や炭もて炭をくだく音

榾火

身延七面山にて

榾の火や祖師の胡座も眼のあたり
ほだの火や家につたはる老ひとり

水鳥

たゞ一羽離別れて行歟鴨の聲
鴛鴦のちぎりや斉の右ひだり

鵠

押分て月こそ出れむらちどり
みを木にもちる物出來て鵠かな
蛤にならじ〳〵と千鳥かな
うごかずに居ればこほる歟むら鵠
千鳥啼夜や名月の照のこし
友見えて月夜の鵠嬉しい歟
吹上て汐くもりゆくちどりかな

雪

ともしびを見れば風あり夜の雪
降くらす雪の相手や水ぐるま
暮て行雪のかつらやひとつ松
雪折つ起つ棹さす小舟かな
白雪の中に灯ともす野守かな
頃日の臺さらして木〻の雪

僧に對す

掃よせん君いざつくれ雪達磨

途中吟

はるかなる火にあたりけり夜の雪
畠ほど八百屋さがすや夜の雪

蓑脱でひとり湧けり雪の友
はづかしき飯くふ雪のあしたかな

鉢扣

鉢たゝき月夜は見えて哀なり
習はふとおもふ夜もあり鉢たゝき

煤掃

はせを翁の一とせ冬籠ありし橋町ちかく居をうつして

袖の香の蓑にもゆかしすゝ拂

衣配

今年あり裁ば去年あり衣配

年内立春

ことしとも去年とも見ゆる柳かな

年内立春の日、年わすれもよほし給ふかたにて

春の日をかりて遊ぶやとしわすれ
年忘洩來る椴の木の間より
夜半にくむ年わすれ井は誰が家

絶〻に聞ふるしのび音に、

ひとり寂寞る草庵のうち

三絃を廬山の雨やとしのくれ

光陰を觀ず

かくて世は嫌づくるなり年の暮

年波の淀とこそ見れしじみ汁

我草の戸は富家の肆にかくれて、樂鹿の遊びを妻こふ猫にかへたり。

金銀の氣に物こほる師走かな

淨破利の氷にうつる師走かな

起されて見れば粟蒸師走かな

酒肆は升にいとまなく、茶肆は秤に事しげしと、師走は友のとぼしければ

鼓屋と浮世かたらむとしのくれ

節分

草廬

鬼は外月は内へともる夜かな

厄拂跡はくまなき月夜かな

大豆殼に七歩の吟ややくはらひ

寶船

たからぶね嵐のしらぬ一間かな

空の名殘惜まんと、入來る客には茗巾の桑門あり、鉢をよこたふる武士あり、猶琵琶はさびしく、鯛ははなやかなり。

蓑笠に庵の狹さよたから船

三芳野に旅寢して花の金の下臥せし妹山脊山の俤も、まのあたり立さらねば

櫻木と戀した文や古こよみ

基佐の風流をわが貧賤の荷擔にとりて

質にをく物に月あり年の暮

東方未明衣裳轉倒

祐成が蝶着て出たり年の暮

あしをそらにまどふが、曉かたよりさすがに晉なく成ぬるこそ

風鈴ときく時としの名殘かな

## 松の風

古加子賀ニ出

蓼太

今茲丙子年六月廿五日、我師吏登翁の一周にあたりて、像前に時菓の奠を備、紅涙に筆を染て、諱で尊靈に告。嗚呼不佞蓼太若かりし時、不幸にして薪を負事あたはず。故國の梅は昔ながらの花芳しけれど、軒はとしゞの秋風に荒て、終に世を墨染の袂にもとおもひ立ぬるは、かのいはほの中に住はかは、とよみけむ人の心なるべし。かゝりける中にも、俳諧の狂句を好て隱遁のおもひ出とす。されど浮世の媚に蹈違へて、いまこ向上の一路はたどらざりしを、一日蟻考老人と新古の境を論ずるに及で、深川に此師ある事をしりぬ。予南人の指車を得る心地して、彌生の三日とみに小舟もとめて霞をわたる。故人家在二桃花岸一とつくれる日のよそほひなるべし。頓て柴門をたゝけば、

主叉幸庵にまかりありと蓮をまうけ、寛語やゝ終て袋に師弟の恩を荷ふ。折節、渉青葉五平舎等落あひて題を探る。わが俳を試給ふなるべし。是ぞ師恩の始なりける。今なを俳に立て懐舊に腸をちぎる。是より月雪花時鳥、年にねり月にきたへて正斧をこふ。猶思ひあまりて奥の細道の跡たどらまほしく暇申入る。師とゞめて、其國や雪深うして秋より末の初旅心、いと便なからん。近きあたりに足かためせよと、みよし野のたのむの鴈の頼む方に文書てたまふ。此秋は玉川の月にふけり、高雄の錦を袖の面目にして、神無月のはじめいほりに歸りぬ。其頃師は深川にいましけるを、川上とこの川下や月の友　とはせを翁の申されし五本松も程ちかきあたりに、若き人〻草堂を結て折〻むかへてけり。常は空坊四壁のみにして、田夫の壌歌葛西舟の呻軌、をのづからにかよふ。はた西山の山〻は霞に消、霧にあらはれて、もとゞりのどし。この庵守せよと招きたまへるより住る方は人に譲、こゝに菜つみ水くみ、其年も暮にけり。曾て蓼太松嶋に赴けるは卯月中の三日也。小名木川を北へわたりて、先龜戸の瑞籬をぬかづき、長途の末をいのり奉る。師も此所迄見送給て綰柳の吟あり。折からの麥の穂なみ、ほと〻ぎす、閑呼鳥とりつかねて唯うつたふるがごく、離別のなみだ胸にせまりけらし。實其秋やおもひいで羽の國に在けるが、ほのかに傳ふ、武江の本所あるは深川わたりの人、魚鼈となるのおそれ有て、わがしれる堂社ことぐく軒をひたせりなど聞ゆるより、されば老師の覺束なさ、なを其人かの人いかに成行けんと、ゆふべの雲を望めども、万里を隔たれば風にむかふ馬もおよぶべからず。たゞ山かなしく浦おもふに絶たり。かくて蓼太江府にたどり入しは十月六日の夕月夜なりしが、先柴門の見しにかはらぬぞうれしかりける。師手を取て、汝が文月七日の文に葉月初の歸路を告たりければ、途中にして此變に逢ぬるよと皆なげきあへり。かしこくも面あはせたりとよろこべる時も、老は先涙もろなりけり。それより漸七とせあまり八とせがほどは須磨に暮、吉野に明て、吾春秋も三十あまりに指を屈す。あゝ師は古稀の齢を跡になして、かの蒼〻たる髪は化して白く、動搖たる齒はぬけ落たり。まことにあはれむべき白頭の翁なりとひとりごち申されしが、此冬門人のあらましは吾にまかせ、因兩の一句に南花眞人が風を慕ひ、蓬の心

はとげられけり。されば蓼太去年の春は駿河路や盧橘の昔をしたふ人〻の招について、卯月皐月の境は其國に在けるを、葛才が文に師のいたつきをおどろかされて、心急ぎの旅はゝきながら、吾又藤枝の驛より暑濕のいたみありて、漸水無月の初草廬にまろび入ぬ。さははかゞ〳〵しくつゐふる事あたはず。只紳(ひつぢな)にすがり空に望むのみ。悔てかへらぬ日數もつもり〳〵て、今年其時其日をおもふ。古人もいへる事あり。言はつくすべく情は終るべからず。よつてもつて五月雨の頃より一日一口の歌仙をつゞり、往事をありのまゝに述ていさゝか師恩に報ふ。又此冊に茂松子が手を借て肖像をうつす。遠して相見さるの門人、近うしてなつかしとおもへる舊知の人〻、一章の手向あらばかならず答あらん。其答るものは何。曉のかねの聲、夕暮の松のあらし。

# 發句集跋

守武の神告曰、俳諧は何にてもなき、あとなしごとを好と、さるかたの言種なれど、何か又世の中それならざらんや。本より連歌に露かはらざる大事ならんかと、誠に雲井をかける時鳥、くゐぜをまもる蛙の聲、いづれか讃佛の緣にあらざるべきやは。家〳〵の風をあらそひ、蝸牛の角のつのめだちたる、何としてか神佛のこゝろに叶侍るべき。さるが中にも絕たるを起し、廢れたるを新むるは、正しく先達のしはざにして、彼是かよひてあるべし。其實みな落て、其花ひとり盛んに、其花かうばしからずして、その實もつぱらほしいままなるは、いづれの道にも取れぬにや。九ツの病をのぞき、三ツの品をそなへ、十七の句法をたゞし、おほくの手爾葉をわかち、あまたの姿を定る事はかたきことになん。堪能の人といへども、句ごとに秀逸にあらずとぞ。唯春の水とゞこほりなく、秋の風聞所あらんこそ句の成れるならんか。其なれる句〳〵撰び集ることは、むかしよりかはらぬものから、世〳〵の變風は猶有ぬべし。今をもて古にならふるに火水よりも異とは、昔の人もなげき申されしか。梢にほこる花の春をもむかしとながめ、深山に積る朽葉の冬をも古と見んに、取捨は其人の心〳〵に有ぬべき事にぞ。今の雪中庵主の句〳〵櫻木に移すよし聞ふるに、其流れ汲我輩の、さすがによしともあしともいふべきにあらねば、今なを古のごとく此道のあとなしごとにはあらじかしと、書林の乞にまかせて筆を取のみ。

時明和六丑の秋　　時雨窓月巢